東北タイの家畜飼養にみるモラル・エコノミーの変容

ーアフリカとの比較の参照点としてー

津村 文彦 (福井県立大学)

Changes in the Moral Economy in Livestock Raising in Northeastern Thailand: A Comparison between Southeast Asia and Africa

Fumihiko Tsumura (Fukui Prefectural University)

While the subject of “moral economy” has rarely attracted attention in Southeast Asian studies, the African moral economy has recently been actively discussed by such scholars as G. Hyden and K. Sugimura, who aim to elucidate characteristics of the African economy by examining the locals’ way of life as supported by everyday morals. This paper aims to provide another view of the African moral economy by investigating village economics in Southeast Asia, focusing, in particular, on livestock raising in the northeastern region of Thailand, known as Isan.

In Isan, where sticky rice is cultivated as the principle crop, water buffaloes were traditionally raised as draft animals. In the past, water buffaloes played various important roles, such as in economic

risk management or in the reinforcement of social relations. However, since the 1970s, Isan villagers have experienced rapid social changes, and livestock raising too has changed. According to the national and provincial statistics, it is said that the importance of water buffaloes has declined through the 1990s and cattle raising has simultaneously emerged as a substitute.

However, such a macroscopic analysis does not reflect the reality of livestock raising in Isan. In this paper, we perform a more microscopic analysis of the change in the livestock population at a household level for the period 2001–2011 and try to identify the speculative trend of cattle raising and the durability of and change in water buffalo raising.

1. モラル・エコノミー論の現在

「モラル・エコノミー」をめぐる議論は、J. C. スコットの『モラル・エコノミー』がその嚆矢であった [1]. スコットは、歴史学者 E. P. トムソンの「貧民のモラル・エコノミー」概念を手がかりに、1930 年代東南アジアの農民運動の特徴を分析して、その経済活動から「生存維持倫理」と「互酬性の規範」という道徳的原理「モラル・エコノミー」を抽出した。特に食糧難に直面した際に、共同体の福祉を優先する経済倫理がみられることに注目し、利潤追求を主目的とする市場経済の進展のなか、従来の生命維持倫理 (subsistence) が侵されることへの反発として農民運動を捉えた。一方、S. L. ポブキン [2] は、市場経済の浸透以前から、たとえ一時的には公共の

福利を優先するようにみえようとも、東南アジア農民は、個人的利益と費用との比較考慮のもとに経済活動を行っていると主張して、スコットとは異なる「合理的農民」像を描き出した。

この論争は「モラル・エコノミー」を〈実態〉と解釈するか、〈規範〉と解釈するかの方針の違いによるもので [3]、その後の東南アジア地域研究では「モラル・エコノミー」という言葉はあまり聞かれなくなった。だがアフリカ地域研究では、ゴラン・ハイデンの「情の経済 (economy of affection)」とそれに触発された杉村らによって「アフリカ・モラル・エコノミー」論が活発に展開しつつある [4] [5]. 杉村らは、1970 年代以降に急速な経済発展を遂げた東南アジアと比較した場合の、停滞したアフリカ

経済の特質を捉えるキーワードとして、「生活規範に支えられた生活のかたち」であるモラル・エコノミーに着目した。そこでは「前近代の性格としての側面のみならず、持続的発展・内発的発展など現地の慣習の世界との連動の可能性」[4]が焦点化され、慣習の世界を含み混んだ生活領域が対象となる。「エコノミー」は必ずしも市場を媒介とした「経済」に限定せず、文化的特質も視野に入れ、慣習（規範）と経済・文化を架橋するものとして位置づけられる。こうした「モラル・エコノミー」論の観点は、単純な「実体論」や「規範論」を超えたところに、多元的な価値を含みもつ現代社会での経済活動を問題化する枠組を提供することができるだろう。

2. 東南アジアの稲作と家畜飼養

アフリカ農村の研究動向を前にして、本論では、もう一度、東南アジア、特に現代の東北タイ村落を対象として、農村経済のきわめて現代的状況を分析することで、アフリカ・モラル・エコノミーを考える際の一つの参照点を描くことを目的とする。具体的には、経済的なリスク回避、社会関係の維持などの役割を伝統的に果たしてきた「家畜」に焦点を当て、東北タイにおける家畜飼養の持続と変容を指摘したうえで、アフリカの家畜飼養との相違点について言及したい。

アフリカにおいて牧畜民・農牧民研究は農村経済を考えるうえで無視することはできない。婚資など交換財としての社会的価値や供儀儀礼などにみられる象徴的価値、また富者としての地位を示す政治的価値など、資本主義的な家畜飼養とは異なった、多角的な家畜の意味づけをめぐって研究が蓄積されてきた。だが東南アジアでは「牧畜民」と呼べる人びとは存在しない。牧畜を「有蹄類の草食性家畜群を群れとして管理することによって得られる生産物に、食料や衣服の織物などの日常生活の必需品を依存する比重のたかい生活様式」[6]と定義するなら、東南アジアに「牧畜」はみられない。

とはいえ東南アジアにも家畜飼養は存在する。地域によっては水牛供儀もみられ、家畜の象徴的利用がないわけではない。だが伝統的な生活様式は農業に依存しており、特に水田稲作を中心に東南アジアの農業研究は進展してきた。本論文が対象とする東北タイに限っても、1960年代半ば以降は村落社会

を中心にした膨大な研究蓄積があり（[7],[8]ほか）、東北タイの自然環境に規定された天水依存の稲作社会の特異性に着目して農村経済の研究が深化してきたといえる。

こうした研究のなかで家畜の存在がまったく無視されてきたわけではない。役畜や貯蓄財としての家畜についてはこれまでも言及されている。だがあくまでも「不安定な降雨と貧しい土壌」という東北タイの厳しい自然環境で行われる天水田稲作の分析が最前面に配置され、家畜飼養は周縁的にしか扱われてこなかった[9]。本論は東北タイの農業や経済において稲作がもつ重要性を否定するものではない。実際に農村の生業は米作りが中心であるし、穀霊信仰や農事儀礼など米と稲作は人びとの信仰に深く関わっており、村落生活の諸局面で稲作が重要な意味を担っていることは疑い得ない。とはいえ稲作を中心とした議論だけでは家畜をめぐる状況を十分に分析することはできない。家畜と人との関わり、稲作以外の要素との連関など抜け落ちてしまう部分は少なくない。そこで、本論ではあえて家畜を中心に据えて東北タイの農村経済を描き、家畜飼養に関連した「生活規範に支えられた生活のかたち」を抽出することを目指す。

3. 東北タイの家畜飼養

東北タイでは牛、水牛、豚、鶏、アヒルなどの家畜が飼養されている。これらは飼養形態から、(a) 草や稲藁などの粗飼料を中心に飼養され役畜としても用いられたもの（牛と水牛）、(b) 米ぬかや濃厚飼料を用いて畜舎内で飼養されるもの（豚）、(c) 家屋の敷地内で放し飼いされるもの（鶏とアヒル）に分けられる。このうち本論ではおもに牛と水牛を取り上げる。

東北タイの天水田地域は、19世紀半ば以来の開拓で開かれた村落が多い。開拓村では、最初に水が溜まった窪地や池（*nong*）の周りに集落が置かれ、集落の周縁部に水田が作られた。一方、集落から離れた微高地は、かなりの雨が降らないかぎり天水田として利用できず、商品作物の栽培や牧草地として用いられた。また集落付近にある池も、灌漑のためというよりは、役畜である水牛の休憩地として多く利用された。このように東北タイの天水田地域は、稲作のみならず、畑作と家畜飼養が組み合わされる

図 1. タイ国における家畜頭数の推移

([10]より筆者作成)

図 2. コーンクーン県における家畜頭数の推移

([10]より筆者作成)

ことで有効に土地利用が行われてきたことはこれまでにも指摘されている [7], [8].

東北タイでは、1970 年代以降、貨幣経済や商品経済が浸透して急速な社会変化が進展した。サトウキビやキャッサバなどの商品作物の導入、稲の栽培品種数の減少と直播きの増加、耕耘機の使用、農業以外の賃労働への従事などのほか、家畜飼養の状況も大きく転換した。家畜に関する統計をみると、伝統的に役畜として飼養されてきた水牛は 1990 年代初頭より急速に頭数を減らす一方で、80 年代末より肉用牛の飼育頭数が増加したことがわかる [10].

とはいえ、図 1 や図 2 のような国レベル、県レベルの家畜頭数のデータからは、家畜を飼養する世帯レベルの飼育頭数の推移はうかがえない。巨視的には水牛飼養が減少し、牛飼養が増加していることは明らかだが、世帯ごとに家畜飼養の目的や方法は異なっているし、家畜の意味づけも過去とは同じではない。そのためには個別世帯でいかなる飼養が行われているかを具体的に分析する必要があるだろう。

4. 調査村における家畜飼養のパターン

東北タイ・コーンクーン県ムアン郡の調査村落において、2011 年 8 月に実施したインタビューにもとづき、2001 年から 2011 年までの 11 年間の世帯ごとの家畜頭数の推移を検討する (人口 601 人、163 世帯)。現在の村落全体では、水牛の飼育世帯は 5 世帯 (計 18 頭)、牛の飼育世帯は 21 世帯 (計 79 頭) である。以下では、過去 10 年間に牛や水牛を飼育し

た経験のある 9 世帯を取り上げる。水田と畑をあわせた所有面積の小さい世帯から順に紹介する (1 ライ = 1,600 平方メートル)。

(1) 世帯 A: 世帯員 4 人, 水田 0 ライ, 畑 0 ライ, 村外で賃労働を行う者 2 人

所有する田地はなく、稲作は借りた水田で行う。結婚時に夫方より分与された水牛を飼養していたが、2004 年に子どもの入院治療費のため、それ以降も生活費のためにオス水牛を売却した (1 頭あたり 3,000 バーツ)。2008 年には同居していた妻方の祖母の葬儀の見舞金でメス牛 1 頭を購入した (7,000 バーツ)。村の寺院からは別に 1 頭のメス牛を格安で譲り受けた (599 バーツ)。世帯主が寺院の活動を日常的に支えていたことから選ばれて、寺院から格安で買い受けた。2009 年には生活費のために牛をすべて売却した。2011 年には水牛もすべて売却して、耕耘機を購入した。

(2) 世帯 B: 6 人, 水田 4 ライ (ほか借地 10 ライ), 畑 0 ライ, 村外での賃労働 2 人

2002 年に借金をしてメス牛を購入した (28,000 バーツ)。2003 年と 2004 年には子牛を売却した。村外労働が忙しくなったため、2005 年に牛をすべて売却した。2009 年には再びメス牛を購入し (12,000 バーツ)、翌年にはすべて売却した (25,000 バーツ)。得られた資金で豚を購入して肥育した (2,400 バーツ)。だが豚舎や飼料に金がかかり、想定していたほどの利益が出ないため、2011 年にはすべて売却した (7,000 バーツ)。耕耘機は 2009 年に購入した。

表 1. 調査村における世帯別の牛と水牛頭数の推移

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
世帯 A 水牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0
牛頭数	12	13	15	11	10	9	8	8	7	6	0
世帯 B 水牛頭数	0	3	3	4	5	0	0	0	1	2	0
牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
世帯 C 水牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	4
牛頭数	0	0	0	0	0	1	1	2	3	0	0
世帯 D 水牛頭数	0	1	2	3	3	0	0	1	2	3	0
牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
世帯 E 水牛頭数	0	0	0	0	0	0	3	4	6	7	1
牛頭数	10	10	10	10	10	12	0	0	0	0	0
世帯 F 水牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
牛頭数	16	6	5	5	5	5	5	5	2	2	4
世帯 G 水牛頭数	0	0	0	1	2	3	4	5	0	0	0
牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
世帯 H 水牛頭数	0	0	0	0	0	0	3	3	6	9	3
牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
世帯 I 水牛頭数	0	2	2	4	5	2	5	0	0	0	0
牛頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(3) 世帯 C：5 人，水田 5 ライ，畑 0 ライ，村外での賃労働 2 人

2006 年に借金をしてメス水牛を購入した。3 年後に増えた水牛をすべて売却して（30,000 パーツ），得た金でメス牛と子牛を購入した（26,000 パーツ）。現在は増えて 4 頭の牛を飼養している。

(4) 世帯 D：2 人，水田 4 ライ，畑 4 ライ，村外での賃労働 0 人

2002 年に市場でメス牛を購入して（12,000 パーツ），肉牛の飼養を開始した。だが 2005 年には増えた子牛とともに 3 頭すべてを売却し（25,000 パーツ），得られた金で耕耘機を購入した。2008 年にはサトウキビ栽培で得られた資金で再びメス牛と豚を購入した。2010 年には増えた子牛とともに 3 頭を売却した（25,000 パーツ）。

(5) 世帯 E：3 人，水田 9 ライ，畑 0 ライ，村外での賃労働 0 人

水牛は以前から飼いつけていたが，2006 年までに毎年 1 頭ほどオス水牛を売却（3,000 パーツ）した。2006 年には家を建てるため，12 頭すべてを売却した（40,000 パーツ）。余剰の金で，2007 年にメス牛と子牛を購入し，2010 年にすべてを売却した（1 頭あたり 15,000 パーツ）。2011 年に再びメス牛を購入し飼養している（9,700 パーツ）。耕耘機は 2009 年に購入した。

(6) 世帯 F：4 人，水田 10 ライ，畑 0 ライ，村外での賃労働 0 人

2002 年に耕耘機購入のため水牛を 10 頭売却した。それ以降もオス水牛を売却して生活費の不足を補っている。豚は 2001 年まで飼養していたが，安くて利益が少ないので以降は飼養していない。2010 年には親族の 1 人からメス牛を預かって飼養している。その場合は，村の慣例で生まれた子牛は 1 頭目が飼養者のものになり，2 頭目が所有者のものとなる。

(7) 世帯 G：8 人，水田 15 ライ（ほか 10 ライの借地），畑 5 ライ，村外での賃労働 2 人

2004 年にメス牛を購入し祖父が世話をしたが，高齢のため 2008 年にはすべて売却した。2010 年には子豚を 22 匹購入し（24,000 パーツ），肥育して売却した（48,000 パーツ）。2011 年に再び豚を 3 匹肥育している。耕耘機は 20 年以上前に購入した。

(8) 世帯 H：4 人，水田 18 ライ，畑 6 ライ，村外での賃労働 1 人

2000 年には牛も水牛も飼っていなかったが，2005 年に豚を購入し，現在まで肥育している。2007 年にはメス牛を購入し（42,000 パーツ），2010 年まで増やしたあとすべて売却した。再度 2011 年にメス牛と子牛を購入している（20,000 パーツ）。牛の売却費用で豚の飼育を拡大し，現在は 20 匹前後を肥育している。耕耘機は 20 年以上前に購入した。

(9) 世帯 I : 7 人, 水田 14 ライ, 畑 16 ライ, 村外での賃労働 0 人

2000 年に娘の結婚に際して, 牛を売却し費用に充てた。2003 ~ 2005 年は, オス牛が生まれると売却した (4,000 バーツ)。2008 年にはすべての牛を売却し (40,000 バーツ), 豚を購入した。自然繁殖で, 2009 年には最大 29 匹になったが, 2011 年にはすべてを売却して, 耕耘機を購入した。

5. 水牛飼養の継続性と牛飼養の投機性

以上の世帯ごとの家畜飼養の事例より, いくつかの点が指摘できる。まずは水牛飼養と牛飼養の質的な相違である。国や県の統計では, 水牛の飼養から牛の飼養へと飼養家畜が移行したようにみえるが, 単純に水牛が牛に入れ替わったわけではない。調査村での水牛飼養は過去数十年にわたって継続されてきたものが, いくつかの世帯で 2000 年代まで連続的に行われている。水牛は売るために飼養するというよりは伝統的な役畜飼養の延長上にあって, 特にメス水牛の場合は死ぬまで面倒をみることが多い。一方で牛の飼養には, 過去からの継続性はあまり指摘できない。多くの世帯で, 2 ~ 4 年の期間だけ飼養して売却する。市場などからメス牛のみ, またはメス牛と子牛の一組を購入して, 数年のあいだ育てたのち, 生まれた牛も含めてすべて売却するのが一般的なパターンである。水牛は伝統的な生活スタイルに組み込まれたかたちで長期的に飼養されるが, 牛は当初から短期的な視点で飼養されるといえるだろう。牛を売却する理由として, 村外労働の拡大 (世帯 B) が挙げられるのは, 牛飼養が現金獲得の手段として明確に意識されていることを示している。「牛をたくさん飼う者は金持ちだが, 水牛をたくさん飼う者は貧しい」と村人は語るが, この語りからも, 水牛と比べて牛が, 貨幣あるいは現代的な富と結びつけて捉えられていることがわかる。

とはいえ, 牛と水牛の売却の理由をみると, 両者ともにある種の貯蓄財として機能しているともいえる。ただし, 牛は日常的な生活費の補填のために売却されるのに対して, 水牛の売却は, 入院費 (世帯 A) や家の新築 (世帯 E), 耕耘機を購入 (世帯 F) など, より大規模な出費に関連している。水牛は牛に比べると予期できない必要性に対処するような長期の貯蓄財として機能していることがわかる。逆に,

通常的生活費の不足を補うために容易に売却される牛は短期間のサイクルで飼養され, 飼っているあいだに生まれる子牛を利益として求めるような投機的意図をもった家畜飼養と位置づけられる。

水牛を売って大金を得たという話を耳にすると, 村人はなかば憧れまじりに, 次のように語る。「昔は水牛を飼っているのは貧乏人だったが, 最近の水牛を飼っている人は金持ちだ」。この語りは前の語りとは矛盾するものではあるが, 近年は水牛を飼養する者自体が少数派となり, 長期貯蓄財をもつ者はむしろ余力のある者に限られるという現状を背景にすれば理解できるだろう。

さらに, 牛飼養の短期的な投機目的を注視すると, 牛と豚の飼養の類似点に気づく。調査村落では, 豚については, 交配して頭数増加を図ることを飼育者自身はほとんど行わない。子豚を購入し, 4 ヶ月ほど肥育してから売却するという投機的な飼養が一般的である。予算に応じて 3 ~ 8 頭ほどを購入し, 4 ヶ月後には 2 ~ 5 倍の値段で売却する。飼料や豚舎に資金がかかるので, 誰もができるわけではないが, 牛よりも資金の回収期間が短いので, 近年は牛飼養から豚飼養に切り替える者が, 特に土地を多くもつ者のあいだにみられる (世帯 G, H, I)。

とはいえ, 水牛飼養のすべてが伝統の名残りで, 牛飼養が近代的だというわけでもない。たとえば, 世帯 F では継続して水牛が飼養されているが, その理由はサトウキビ畑の耕作と関連して説明される。サトウキビ畑では株ごとの幅が狭く, 水田の稲作に用いる耕耘機では, 刃に根が絡んでしまうので, 別の刃を用意しなければならない。だが水牛で犁を引けばこうした問題は生じないので, 水牛をもたないサトウキビ農家は, 耕作のために水牛を借りることすらある。自分のサトウキビ畑の耕作に用いるだけでなく, 水牛を借し出した際には賃料まで得られ, 水牛飼養は経済的に有利なのだという。

また投機的な様相を色濃くみせる牛の飼養にも, 伝統的な特色が指摘できる。寺院からの買い受けをした世帯 A はその一例である。村では, 悪運を払うために占い師から牛を寺院に寄進することを勧められることがある。寺に寄進された牛は, 僧侶や在家総代との話し合いで選ばれた世帯に格安で売却される。さらに多くの事例を検討する必要があるだろうが, ここからは寺院を媒介とした牛という「富の

再分配」を指摘できるだろう。

世帯 F では親族から無償で牛を譲り受けて飼養している。近しい親族や友人から借り受けて飼養して、生まれた子牛はオス、メスにかかわらず、1頭目は飼養者のものに、2頭目は所有主のものになるという委託飼養が調査村では伝統的に行われていた。これも「富の再分配」のもう一つのかたちであり、近年投機的に行われている牛飼養にもこのような様態がみられることは注目すべきである。

マクロな家畜飼養の推移ではなく、世帯ごとの家畜飼養の頭数変化を追うことで、現代の東北タイ農村における水牛飼養の伝統の継承と牛飼養の投機性を指摘することができた。両者は単純に入れ替わったというよりは、耕耘機の導入と村外労働の増加により、家畜の意味づけそのものが変化し、水牛飼養と牛飼養があらたに村落生活のなかに組み込まれたとみることができよう。

現在の東北タイ農村では、村人の多くは近くの街や工場に出かけて日銭を得て、市場や商店で日常生活に必要な物品を購入する。実際に、かつて役畜として飼われ、農村経済のなかに有機的に組み込まれた水牛は、ほとんどの者が手放してしまったため、現在ではごくわずかに飼養されているのみである。村人の多くは短期的な投機目的で、売るために牛や豚を肥育している。こうした状況からは、アフリカの牧畜民や農牧民の研究で指摘されているような、家畜を通じた相互扶助によって、人びとが生存維持を図るような「モラル・エコノミー」のすがたを見出すことはできない。もはや東北タイの人びとの日常生活は、農業や家畜飼養だけでなく、むしろそれ以外の賃労働、金銭によって十分に支えられている。その意味では、多くのアフリカ農村と比べて、商品経済が村落生活の全体に浸透したような東北タイの農村では、個々の人びとの賃労働に従事する機会の豊富さが新たなセーフティネットを個別に形成しているといえよう。

とはいえ、水牛の飼養は依然として長期的な貯蓄財として機能しているし、牛飼養のなかにも伝統的な相互扶助的な飼養スタイルが現在もみられる。もはや商品経済が支配的な現代の村落空間においても、共同体的な規範が経済論理と結節する領域が完全に消失したわけではない。寺院を介した牛の再分配や、親族間での委託飼養などの様子を見ると、投

機的な思惑によって個別に牛が飼養されているばかりではなく、村レベルや親族レベルでの相互扶助的な家畜飼養のあり方もみることができる。商品作物の栽培や、村落外での就労など、貨幣獲得の機会が多様に拡大するなかで、家畜飼養が少しずつ姿を変えながら村落生活のなかに再配置される様子を、東北タイの家畜飼養の世帯ごとの分析から指摘することができるだろう。

参考文献

- [1] James C.Scott, *The Moral Economy of the Peasant* (London: Yale University, 1976).
- [2] Samuel L. Popkin, *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 1979).
- [3] 原洋之介「東南アジア農村社会論—地域研究と経済理論—」、『東洋文化』第63号(1983), pp. 3-26.
- [4] 杉村和彦「アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角」、『アフリカ研究』no. 70 (2007), pp. 27-34.
- [5] K. Sugimura, "Contemporary Perspectives on African Moral Economy" (in) I.N. Kimambo, G. Hyden, S. Maghimbi & K. Sugimura (eds.), *Contemporary Perspectives on African Moral Economy* (Dar es Salaam: Dar es Salaam University Press, 2008), pp. 3-15.
- [6] 石毛直道「乳利用の文化史」, 雪印乳業健康生活研究所(編)『乳利用の民族誌』, 中央法規出版, 1992年, pp. 9-21.
- [7] 福井捷郎「エコロジーと技術」, 渡部忠世ほか『アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー—』, 小学館, 1987, pp. 277-331.
- [8] 海田能宏「稲作と水利」, 高谷好一(編)『東南アジアの自然』, 弘文堂, 1990, pp. 189-214.
- [9] 津村文彦「東北タイにおける家畜飼養の変容—牛と水牛から見た農村経済—」, 『福井県立大学論集』, 第24号(2004), pp. 85-104.
- [10] National Statistical Office, *Statistical Year Book Thailand*, (Bangkok: National Statistical Office Thailand, 1970-2000).

(受理日: 2012年3月2日)